実践型地域研究ニュースレター no. 12

ざいちのち

実践型地域研究ニュースレター No. 12　2009 年 10 月

まちやむら、そこに住む人びと（＝ざいち）の、
知恵や生き方（＝ち）から学び、実践する活動です。

京都大学
生存基盤科学研究ユニット
東南アジア研究所　「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

京都市　保津峡

亀岡フィールドステーション

筏がつなぐ「ひと」「もの」「ちいき」

亀岡 FS 研究員　河原林洋

去る 10 月 4 日、京都大学総合博物館において『自然と暮らし トークイベント：筏がつなぐ「ひと」「もの」「ちいき」』が行われた。研究対象としている保津川の筏流しの関係者を招いてのトークイベントである。出演者は元筏士の上田潔氏（89 歳）、酒井昭男氏（82 歳）、鍛冶の片井操氏（79 歳）、亀岡市文化資料館館長の黒川孝宏氏、そして私である。

約 60 年前まで生業として「いかだ」を流していた元筏士、約 60 年前まで生業として筏組みに使う金具「カン」を作っていた鍛冶。実際に、片井氏のカンを使って、上田氏と酒井氏は筏を組んでいたそうである。しかし、60 年前には一度も顔を合わすことはなかった。「他人の仕事を見る暇なんてなかった。自分の仕事で精いっぱいやった」。片井氏の言葉である。9 月 9 日、京都市右京区保津峡内の保津川で、筏流しを行った。その時、片井氏を招待した。自分の作った「カン」が使われるところを 60 年の歳月を経て、初めて見たのである。「カンを打ち込む音を聞くたびに、ありがたいと思った」と感想をおっしゃっていた。鍛冶が精魂こめて作ったカンが、命のかかる筏流しに使われる。そこには、「もの」を通じた「ひと」の命のやり取りがあったように思える。それだからこそ、片井氏は、カンを打ち込む響きに、当時の仕事のつらさを思い出し、当時の自分の仕事の意義を初めて認識したのではないだろうか？

元筏士の方にも、当時の仕事内容を語っていただいた。筏の仕事は、主に冬場で、足袋にわらじを履くだけで、寒さが身にしむ大変な仕事であった。「辛かったなぁ～。ようあんな仕事しとったなぁ～」。率直な元筏士の感想である。筏流しができる日は一日筏を組んで流す。川が増水し、筏流しが出来ない日は、一日、山に入って、筏組みに使う藤蔓を切る。筏の仕事も休みがない。また、カンは一回筏組みに使うと、川に落としたり、筏の引き継ぎの時に紛失したりと、約 5 分から 1 割ほど減り、その度に鍛冶屋にカンを発注していた。しかし、元筏士の方々も、カンが作られるところを見たことがないそうで、今年 6 月 4 日に、お二人を片井氏のところへ案内した。初めて見るカン作りを食い入るようにご覧になり、「もっと簡単に（カンを）作れるものと思っておりました。もっと大事に使ったらよかったなぁ～」と。

「そうま」[1]が、夏に切った材木は夏・秋に乾燥させ、冬に出荷される。切った材木は、木馬（きんま）[2]で、川沿いまで運ばれ、筏士が組んで、保津川を流していた。その上荷として、地域で産出する薪、炭、割木、時には今では貴重な松茸が大量に運ばれた。

丹波という「ちいき」において、山の産物＝材木、藤蔓、把物（たばもの）[3]など、町の産物＝カンなどの「もの」が、「ちいき」の「ひと」の生業となり、「命」を紡いでいく。

いかに、「ちいき」の中に埋没しつつある「もの」と「ひと」とのつながりを再構築していくのか。そこに、沈滞化する「ちいき」という共同体の再構築をひも解くかぎがあるのではないだろうか。このトークイベントがそのきっかけとなれば幸いである。

写真：トークイベントの様子。半世紀前の筏文化を語り合う。（2009 年 10 月 4 日）

脚注

[1]そうまは、亀岡では杣(そま)がなまって「そうま」と呼ばれていたようだ。杣とは林木の茂る山、木材採取の山の意から転じて、伐木作業、さらには伐採、造材に働く杣人（そまびとの名称ともなった。

[2]木馬は木材の運搬に使うそりである。木馬を引っ張って木材を搬出するのを「木馬引き」と呼ぶ。保津峡では木馬での搬出に使う「木馬道」（きんまみち）が、木材を搬出する場所ごとに作られた。

[3]把物は千把（薪や炭）、柴、割り木を総称する言葉。

「琵琶湖に生きる」漁師のはなし
—京都大学総合博物館にて—

守山 FS 研究員　嶋田奈穂子

「漁以外のことになると、わしは丘にあがったカッパみたいなもんやさかい」。
琵琶湖漁師・戸田直弘さんのいつもの自己紹介である。今回は京都大学総合博物館でそれを聞くことが出来た。京都大学総合博物館 学術映像博 2009 のトークイベントで、「琵琶湖に生きる」毎日の話、漁の話、魚の話をしていただいた。

いつもは、港や船の上で、戸田さんの仕事の合間に話を聞かせてもらっている。エリ漁の合間、ミシンで網を縫っている合間。漁港の加工場で魚を炊きながら、鍋を覗きこんで「この鍋の底のコゲ、鮎の形しとるやろ。ワシがやってしもたんや」と、笑うときもある。

「今年は野洲川の放水路にビワマスが遡ったんやで。密猟者がその証拠や。あいつらは、ビワマスがおるかおらんかのバロメーターや。放水路ができてから 30 年たつけど、今までビワマスは遡らんかった。昔からの川と、何かが違ったんやろな。今やっと魚が本物の川やと認めてくれよったんやな」と、リアルタイムの琵琶湖や川の様子を教えてもらうこともある。野洲川は 1979 年（昭和 54 年）、下流の南北流が廃止され、新しい放水路に付け替えられた。もちろんこの 30 年間、水は流れ、放水路は河川としての機能を果たしてきたと思う。しかし、魚は違った、と戸田さんは言う。魚が遡って初めて、川は川になるのだと言うのである。そんな時、私はいつも、漁師の目、いや魚の目に映る風景を戸田さんは見ているんだなと思う。

博物館での戸田さんは、いつもと変わらない様子で漁や魚の話をしてくださった。サービス精神があふれる人なので、時にちゃんと笑いもとった。地域で身体を張って生きている人として、データ至上主義の研究者がもつ言葉のトゲに対しての苦言も呈した。そして話が終盤にさしかかったときに出た、戸田さんの一言が、私には少しショックだった。

「これからも漁師として、琵琶湖に生かされていきたいんです」。戸田さんは言い、次の言葉までに少しの間があった。

この言葉が、決意というか、願いのように聞こえたのは私だけだろうか。琵琶湖の漁業には水質悪化や外来魚問題が立ちはだかっている。その中でも、戸田さんはこの先もずっと漁師をしていくんだと、それが当然のように、私はただ漠然と考えていた。もちろん、常々彼は「死ぬまで漁師をする」と言っているが、そのために必要な相当の覚悟や努力、願いがあの言葉ににじみ出るようで、それに今さらながら気づいた自分が情けなかったのである。

琵琶湖の漁業にほんの少しでも関わることができた者として、また琵琶湖漁師の生き方や思いに少しでも触れた者として、私は私の立場から、彼らがごく自然に琵琶湖漁師であり続けることができるように努力していきたい。

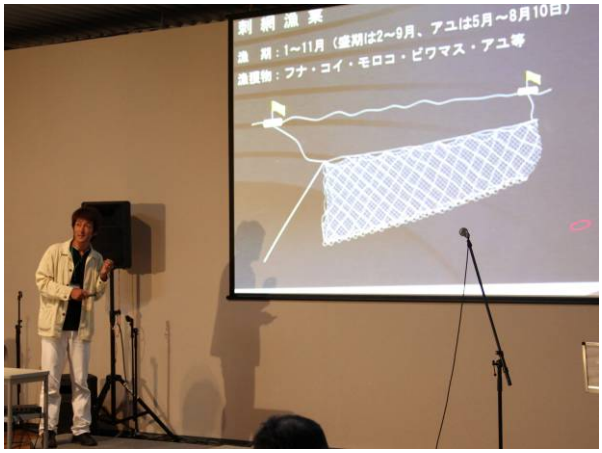

写真 1：映像を用いて、琵琶湖の漁法を説明する様子。（2009 年 10 月 3 日　山下俊介氏撮影）

写真 2：琵琶湖漁師・戸田直弘氏。（2009 年 10 月 3 日　山下俊介氏撮影）

今年の牛耕は代かき

滋賀県立大学／朽木 FS　黒田末寿

高島市椋川でおこなっている牛耕の試みも３年目になった。今年は田の荒起こしに牛を扱う時間がとれず、水廻し・代かきに登場してもらった。田植えができる状態にするには、田起こし、砕土、水を入れて土とよく混ぜてならす作業がある。どの作業にも牛を使うことができるが、固い土を犁で天地返しする荒起こしが、牛にとっては一番キツイ。水廻し・代かきは、苗を植えやすくするだけでなく、できたとろとろの泥水が田底のひびを塞いで水漏れを防止する。

牛にとっては、脚は多少とられても、代かきは荒起こしに比べてずいぶん楽である。そのせいか、それとも牛耕に慣れてきたのか、牛はずいぶん素直に田んぼを行き来してくれ、作業がはかどった。３年目にしてやっと、少々ごまかしの感があるが、わりとすんなり働いてくれたのだった。

中国地方の山間地域には、牛供養田とか花田植えとか言って、代かきに牛を使い、早乙女姿の女性たちが田植え歌に合わせて作業する祭りが残っている。代かきは豪華な引き鞍をつけた何頭もの牛が水田をぐるぐる回って行う。いまは、牛は華やかな装いで水田をまわり歩くだけになっているが、かつては牛の姿と水田をならし回る経路の形、一筆書きをする形を競う祭りであった。そういう土地なので、毎日の訓練を欠かさなかったし、操牛法も発達していて、昭和 30 年頃までは牛を碁盤の上にあがらせるようなことができる人が何人もいた。

しかし、椋川ではとくに牛を訓練する方法が伝わっていない。博労が子牛を歩かせて椋川に連れてきていたということだから、その時に基礎訓練ができていたのだろう。牛は臆病で人が後ろに立つのをいやがる性向がある。小さいときから人の前を落ち着いて歩くよう慣らさないと牛耕はできないが、トラックのない時代、博労と道を歩くことが役に立っていたということだ。写真のハルエ号の場合は、椋川の井上四郎太夫さんが腰にブラシを当ててやり人が後ろに回るのを慣らしたことが、大きな効果を生んでいる。牛と人の信頼関係というだけではわからない技術である。

写真：代かきをするハルエ号（写真：辻村耕司氏）。荒起こしに比べ楽な作業だったからか、素直によく働いてくれた。

焼畑の近況

朽木 FS 研究員　増田和也

８月下旬に「ウッディーパル余呉」（余呉町中之郷）に拓いた焼畑。火入れ・播種から約１ヶ月半が経過しました。焼畑のその後の様子をお伝えします。

山かぶらの収穫は 11 月中の予定。詳細はおってご案内します。ぜひご参加ください。

写真 1：2009 年 9 月 5 日。火入れ・播種から２週間が経過。密生している箇所では間引き作業。（写真：野間直彦氏）

写真 2：2009 年 9 月 18 日。火入れから、およそ1ヶ月が経過。ワセ系の品種（赤倉かぶら）は、すでにこの大きさ。（写真：黒田末壽氏）

写真 3：2009 年 10 月 5 日。地元在来品種も順調に育っています。（写真：野間直彦氏）

写真 4：2009 年 10 月 5 日。一部ではヨモギとイタドリが繁茂し、かぶらが負けてしまっています。火入れ後もしくは鍬入れが不十分だったのでしょうか。（写真：野間直彦氏）

催しのご案内

■第 16 回 定例研究会

1．日時：平成 21 年 10 月 30 日（金）16:00～19:00

2．場所：守山 FS（滋賀県守山市梅田町 12-32）

3．発表者：西村明弘（京都学園大学 人間文化研究科）

4．発表内容

「保津川筏復活プロジェクトにおける地域学の可能性 ～亀岡学を事例に～」

＊参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室（担当：鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp）までご連絡ください。

余呉町の焼畑 ーミャンマーの焼畑との比較からー

生存基盤科学研究ユニット 鈴木玲治

滋賀県余呉町では、朽木FSのメンバーが中心となり、摺墨（するすみ）山菜生産加工組合の永井邦太郎さんと共に焼畑を行っています（本ニューズレター第3号、第7号、第8号、第10号、第11号参照）。

今回は、私が調査研究を行っているミャンマー・バゴー山地の焼畑との比較を交えながら、余呉町で今年行われた焼畑の特徴を紹介したいと思います。

6 月下旬から 7 月上旬にかけて行われた余呉町・菅並（すがなみ）での山開きには、チェーンソーが用いられ、ケヤキやアオダモなどの大木が次々と切り倒されていきました。斧で木々を切り倒すミャンマーでの焼畑に比べ、チェーンソーでの山開きは容易だと思っていましたが、木々を切り倒してからの作業が大変でした。ミャンマーでは、伐倒木は切り倒したままの状態で山腹斜面に放置するのに対し、今回の菅並の焼畑では、伐倒木の幹や太い枝を炭焼きやキノコのほだ木に利用するため、伐倒木を一本一本ワイヤーでくくり、軽トラックで斜面から引きずり下ろしました。全ての伐倒木にワイヤーをかけるため、急斜面を何度も上り下りしなければなりませんでしたが、ミャンマーの焼畑でも太い木の幹は火入れ後に燃え残ることが多いため、これらを燃やさずに他の用途に利用することは、非常に理にかなっていると思います。そして、炭やほだ木に使えない小さな枝葉は、ワイヤーでくくって再び山腹斜面に引っ張り上げ、火入れのための燃材とするのです。また、燃材が足りない場合は、河原のヨシなどを刈って斜面に広げることもあるそうです。

焼畑で火入れをする理由の一つに、伐開跡地での耕作に邪魔な伐倒木は、搬出するよりも燃やす方が容易なことが挙げられることもありますが、永井さんは伐倒木を斜面から引きずり下ろした後に、わざわざ燃材となる枝葉を斜面に引っ張り上げており、火入れが整地作業の一環ではなく、農作物栽培にとって重要なプロセスと考えられていることがわかります。火を入れることにより、焼却灰による養分添加、埋土種子の焼却による雑草抑制など、様々な効果が期待できます。

今年は、永井さんの指導の下、ウッディパル余呉が管理する赤子山スキー場のゲレンデで、夏期の草地を利用した焼畑を行いました。ゲレンデで刈った草だけでは火入れに不十分であったため、ウッディパル余呉の敷地内で伐採したスギの枝葉をトラックで運び、火入れ予定の斜面に敷きつめました。そして、8 月 20 日に火入れを行い（写真 1）、火入れ後には、鍬で地面を 10cm ほど耕しました（写真 2）。耕すことで、地表面付近の有機物や焼却灰が土にすきこまれ、作物の生育にとって良好な状態になるそうです。

耕起をする焼畑をみたのはこれが初めてで、非常に驚きました。ミャンマーでは、雨期の激しい降雨による土壌浸食を避けるため、焼畑で開いた斜面は決して耕さず、堀棒で開けた小さな穴に播種していきます。作付け期間中の降水量の違いが、このような農作業の違いを生んだものと思います。今後も、余呉町での焼畑作業を通じ、焼畑に秘められた様々な在地の技術や知恵を学んでいきたいと思います。

写真 1：ウッディパル余呉での火入れ。敷きつめたスギの枝葉に火をつける。（2009 年 8 月 20 日）

写真 2：火入れ後、鍬を入れてから、カブラとダイコンを播種。（2009 年 8 月 20 日 写真：増田和也氏）

発行：〒606-8501 京都市左京区吉田下阿達町 46
京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室
http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp/pas/
編集：鈴木玲治・藤井美穂